

～目次にしたが、キーワードで比較～

文責：後藤 忠

読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習 後藤 忠	問題解決的な学習 YR 氏	道徳的行動に関する体験的な学習 HY 氏
<p><タイトル> 教材選択と教材提示が命！ さらに、教材分析で的を射た発問構成を！</p>	<p><タイトル> 考え議論する問題解決的な学習 の創意工夫</p>	<p><タイトル> 行動へとつなぐ (「」の記述は評価等の在り方に関する専門家会議報告書別紙1の引用)</p>
<p>1 「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」とはどのような学習か？</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 道徳科の学習は自己を見つめる学習⇒道徳性が育つ ● 見えない心(自己)を見るための「鏡」が教材 ● 道徳的諸価値の理解を基に、教材の登場人物に自我を投影(関与)し、自己を見つめる学習をする。 <p>2 教材選択が最重要の課題(鍵)である！</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「よい教材」は子どもの心を鮮明に映し出す。 ● 教材選択に妥協は許されない。 <p>3 教材提示に命を懸ける！</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 子どもの心に届く教材提示に努める。 ● 教材提示では「問」が大切である。 ● 1回の教材提示で子どもの完璧な教材理解を図る。 <p>4 的を射た発問を構成するには教材分析が不可欠！</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自我関与(自己を投影)する人物を一人(A)に絞る。 ● Aの内面が微妙に変化するところで場面分けをする。 ● 各場面におけるAの内面をすべて書き出す。 ● 「本時のねらい」に直接迫る中心発問場面を1つ決める。 ● 中心発問場面を支える基本発問場面を2つ決める。 ● 発問の表現をよく吟味しながら、3発問を具体的に作る。 <p>5 豊かな道徳的心情の上に確かな道徳的判断力や態度などの道徳性が育つ <略></p>	<p>1 なぜ道徳科に問題解決的な学習か</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 道徳上の問題や課題を解決する資質・能力を養うことに重点を置いたコンピテンシー(能力)・ベースの授業を目指す。 ● 子どもが様々な道徳上の問題と向き合い、知識や価値観や経験を活用して他者と協働しながら解決する学習が重要。 ● 指導方法の質的転換を図る⇒道徳科の実効性を高める。 <p>2 問題解決的な学習の進め方</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 導入 道徳上の問題や教材内容と関連して行う。(経験想起、事例考察、内容項目の概念理解) ● 展開前段 教材の問題の発見(何が問題か、なぜ困っているのか、何と何で迷っているのか、どんな考えが対立しているか)⇒グループで解決策を検討(どうしたらよいか、自分ならどうするか、人間としてどうすべきか、本当はどうしたいか)解決策検討のポイント(根拠に基づいた理由付け、結果の吟味、自他の知識や経験の関連付け) その他解決策検討上の示唆(可逆性の原理、普遍性の原理、互惠性の原理) ● 展開後段 前段の延長として学級全体で話し合う。その他、役割演技、スキル学習、別場面応用が考えられる。 ● 終末 学びのまとめと把握(自分なりの解決方法や結論、実践化や習慣化へとつなぐ) <p>3 問題解決的な学習の留意点 <略></p> <p>4 問題解決的な学習の評価 <略></p>	<p>1 学習指導要領における位置づけ</p> <p>2 専門家会議報告におけるイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> ● この学習のねらいは「役割演技などの疑似体験的な表現活動を通して、道徳的価値の理解を深め、様々な課題や問題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う」こと。 (※ 導入、展開、終末の具体例は専門家会議報告書別紙1を引用して説明) <p>3 役割演技</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Type1 教材をそのままシナリオとして再現する。 ● Type2 教材の1場面を切り取って場面設定だけを行う。 <p>4 スキルトレーニング(モラルスキルトレーニング)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● スキルトレーニングで具体的な行為の仕方を身につけながら、道徳的価値の自覚や理解を深めるプログラムを開発。 <p>5 多様な指導方法間関係と行動の変化</p> <ul style="list-style-type: none"> ● (道徳の学習には自尊感情や心の安定が不可欠) 道徳的価値の理解(自我関与が中心の学習が効果的)⇒道徳的な判断力の育成(問題解決的な学習が効果的)⇒具体的な行為の指導(体験的な学習が効果的) ⇨ 行動(無意識に道徳的行動がとれること)の変化が起こる。 ● (道徳を教科化したきっかけを考えると)行動へとつながる道徳教育でなければ意味はないのではないかと思うが…。

考察及び所感

- 平成 27 年 3 月、学習指導要領の一部改正の告示がされ、同時に同年 4 月から「その全部または一部に基づいて教育課程を編成することができる」ことも示された。そして 7 月に「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」が出された。

しかし、通常同じタイミングで示されていた指導要録の記載などの「評価」に関する資料はなかなか示されなかった。

そして、1 年後の平成 28 年 7 月 22 日によく「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」の報告書が提出されたが、その遅れは異例ともいえる。

報告書の表題に「**特別の教科 道徳**」の**指導方法・評価等について** とあるように指導と評価の一体化を図る観点からの議論が、専門家会議で相当紛糾したであろうことが想像できる。

確かに、教育再生実行会議から始まり、道徳教育懇談会、中央教育審議会、学習指導要領告示に至る一連の経緯の中で、初めから妙にくっ付いて離れなかったのがこの「問題解決的な学習」と「体験的な学習」という具体的な指導方法の例示であった。

- 道徳の教科化が提言され、改正のための一連の検討が始められた当初から、「これま

での道徳教育の実効性のなさ」が指摘されてきた。「道徳教育の成果が挙がっていないのは旧態依然としたその指導法に原因がある。だから、新しい道徳に変えていかなければならない」というのがもっぱらの空気だった。

- 冗談じゃない、道徳教育の実態を本当に知っていて言っているのか。

道徳教育の成果が挙がっていないのは、多くの学校が道徳教育に、とりわけ道徳の時間の指導に真剣に取り組んでこなかったからであり、指導方法の工夫改善に努めてこなかったからに他ならない。

そんなことは学校関係者なら誰もが知っている明白な事実である。

- しかしながら、この度の専門家会議の報告書ではその点の指摘は少し緩和され、今までの道徳教育について、いくつか具体的に成果を評価している記述が見られるが、すでに遅きに失した感は否めない。

- なぜ、学習指導要領に例示してまでこの二つの指導方法の導入にこだわるのか？ 私にはどうしても解せない。

この指導方法は、指導を間違えると道徳性の育成という道徳科授業の特質を損ない

かねない危険性を孕んでいると私は懸念している。

- この度、明治図書月刊誌「道徳教育」(2016.11 月号)に、従来の指導方法を含めて話題になっている「3 つの指導方法」についての特集が生まれ、私もその執筆に加わったので、月刊誌をもとにこの 3 指導法を表にして比較してみた。

- そこでようやく分かったことがある。

それは、3 つの指導方法は道徳科で育てる道徳性の**諸様相(具体像)**がそれぞれ**違う**、つまり学習指導要領に示されている「道徳科の目標」の理解と解釈が**違う**ということである。だから、話がかみ合わなかったのだ。

- いずれにしても、指導方法はあくまでも指導方法であり、本末から言えば末である。本をおざなりにして指導方法という末ばかりいじっているのは本末顛倒である。

真に直視し、議論を深めなければならないのは 3 つの指導方法の「本」のところであって、指導方法そのものではないはずだ。

「本」の議論こそ大事であるのに、未だそのことについて何も聞こえてこない。